



TITLE:

京大広報 No. 690

AUTHOR(S):

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

CITATION:

京都大学渉外部広報・社会連携推進室. 京大広報 No. 690. 京大広報
2013, 690: 3937-3956

ISSUE DATE:

2013-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196383>

RIGHT:



京大広報

No. 690

2013.6



体育会壮行会の様子((左)学生代表による宣誓、(右上)応援団とチアリーダーによる演舞)

—関連記事 本文3953ページ—

目次

京都大学の未来へー病院・国際担当理事として 病院・国際担当理事・副学長 三嶋 理晃	3938
〈大学の動き〉	
京都大学と滋賀県教育委員会との連携に関する 協定を締結	3940
クロックタワーコンサートを開催	3940
京都大学春秋講義(平成25年度春季講義)を開催	3941
日本で最初に edX のコンソーシアムに参加	3941
「入試改革検討本部」の看板除幕式を举行	3942
〈部局の動き〉	
工学研究科物理系四専攻桂キャンパス移転 記念式典を举行	3943
〈寸言〉	
東の理化学研究所から西の京大を思う 玉尾 皓平	3944
〈随想〉	
和歌山での遊 / 学と垣間みた酵素学の深淵 名誉教授 泉井 桂	3945

〈洛書〉	
異文化の自分化ー「我田引水力」 梶島 健治	3946
〈資料〉	
平成24年度 総長裁量経費による採択事項	3947
平成25年度 入学試験諸統計	3947
〈話題〉	
第8回 京都大学附置研究所・センターシンポ ジウムを開催	3952
体育会による壮行会を開催	3953
宇治キャンパスで「平成25年度新任教職員及び 新入院生等のための安全衛生教育」を開催	3953
総合博物館が台湾大学博物館群と国際シンポ ジウムと学術交流を実施	3954
大学文書館 常設展「第三高等学校の歴史」を 開設	3955
薬学研究科で附属薬用植物園の見学会を開催	3955
〈計報〉	3956

京都大学渉外部広報・社会連携推進室

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学の未来へ 一病院・国際担当理事として

病院・国際担当理事・副学長 三嶋 理晃

1. はじめに

平成24年10月1日より、病院・国際担当の理事・副学長を担当しています。また、医学部附属病院長を併任しています。医学部附属病院(以下、京大病院)は、「京都大学の社会貢献に資する」という重責を担っています。一方、大学改革の必要性が叫ばれている中、大学の国際化が最重点事業の一つに挙げられています。本学の「国際社会への貢献の充実」という意味において、「医療の国際化の促進」は重要な要素であります。この意味で、「国際戦略」と「附属病院」とは密接な関係があるといえます。ここでは、本学における両分野の現状と展望を、相互連関を視野に入れてご報告したいと思います。

2. 国際戦略について

本学では、平成12年に「京都大学における国際交流の在り方について」において、国際交流についての理念が提案され、また平成17年度には諸外国の研究教育組織等と緊密に連携しつつ展開する教育研究活動推進の要綱として「国際戦略」が策定され、積極的な国際交流が展開されてきました。しかしこの間、社会・経済のグローバル化が急速に進み、今後さらに国際競争が激化するものと予想される中、本学が「世界に卓越した知の創造を行う大学」として一層の発展をなしていくためには、新たな「国際戦略」の策定と具体的なアクションを強力に推進していくことが必要となっています。そこで、現在、新しい「国際戦略」策定を全学挙げて取り組んでいます。

本学の基本理念(平成13年12月4日制定)は、その前文において、「創立以来築いてきた自由の学風を継承し、発展させつつ、多元的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献するため、自由



と調和を基礎に、ここに基本理念を定める。」と掲げています。

新しい国際戦略もこれを前提とし、「地球規模の視野と多様な地域文化への理解と敬意を根底にすえた教育研究の伝統」および「京都におけ

る1200年におよぶ東西交流が生みだした重層的な文化の蓄積」、そして「京都大学が培ってきた、新しいパラダイムを提唱できる独創力」を原動力としていくことを国際化推進の基本理念とすべきであると考えます。この国際戦略では、その推進にあたり実現すべき三つの基本目標を掲げ、その実現に向けた具体的な施策と目標、さらに当面、重点的に実施すべき施策を策定したいと思います。

第1は、世界的に卓越した国際競争力のある「研究の推進」です。本学は、日本を代表する研究大学として世界から高い評価を受けてきました。本学は基本理念に掲げる「世界的に卓越した知の創造」をより一層実現させるため、世界をリードする学術研究を推進し、世界レベルの研究競争を勝ち抜く力、つまり国際競争力ある大学としての取り組みを全学挙げて推進していくことが必要であると考えます。そのためには、国際的な大学間連携や国際共同研究の促進、若手人材の海外派遣や外国人研究者の採用など研究人材の国際化を積極的に推進するとともに、優れた研究成果の情報発信による国際的な評価を高めていくことが必要です。さらに個々の研究者が自由闊達な研究を推進し、優れた海外の研究者からも魅力と実力ある大学として、その成果を世界に問えるような環境整備を行っていくことが大切です。

第2は、「教育」で、世界に通用する国際力豊かな人材の育成です。本学は、国際社会において、リー

ダーとして世界を牽引する異文化理解力、英語での交渉力、専門力を併せ持つ国際力豊かな人材を輩出する責任があり、世界水準の教育を提供する必要があります。そのため国際的な教育連携を進め、質の保証を行いつつ、学生海外派遣制度の充実、留学生受入れ体制の強化等の多様なプログラムの組成を図ることにより、リーダーに必要不可欠な「国際性」を涵養します。このため留学生と日本人学生がともに学べる外国語による教育を全学で増やすことが肝要です。それは、「世界に開かれた大学として、国際交流を深め、地球社会の調和ある共存に貢献する」という本学の基本理念の実現に繋がるものです。

そして、第3は、地球社会の調和ある共存のための「国際貢献の推進」です。本学は日本を代表とする大学として、また、国際社会を構成する一員として、その研究・教育の成果を様々な形で社会に還元することによる国際貢献が求められています。特に、地球規模での課題である人口問題、食糧問題、環境問題、資源・エネルギー問題、医療問題などの解決において、本学の総合力を駆使して、地球社会に一層の貢献を果たすよう努力することです。

以上の基本目標を達成するために、数値目標を明確に設定すること、事務組織を強化することなどが必要で、様々な施策を検討しています。最近では、国際交流において、国際教育、国際研究などをパッケージとして提示することが原則となりつつあります。本学の優れた知的財産を結集して、世界にそのすばらしさをアピールし、双方にメリットの大きい国際交流を樹立していくのが、本学の使命と考えます。

3. 医学部附属病院について

京大病院は、「患者中心の開かれた病院として安全で質の高い医療を提供する」、「新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する」、「専門家としての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する」の実現を目標として努力をしてきました。

院内の「がんセンター」、「臓器移植医療部」、「リウマチセンター」など、世界に誇る集学的で最先端の医療資源をより強化し、社会に一層貢献する病院を築きたいと考えます。また、京大病院には、最先端医療機器の開発・マネージメントのための人材育成の場としての「最先端医療機器臨床研究センター」、iPS細胞を用いた難病の研究・創薬や再生医療を目的とした「iPS細胞臨床開発部」など豊富な資源があり、臨床研究の全国拠点として「臨床研究中核病院」にも認定されています。これらをもとに「革新的な医療」の創生を目指しています。

教育面では、関係病院と連携して、医学部教育と初期研修教育の整合性の確保、初期研修医の処遇改善、若い医師の関係病院間の円滑なローテーションの確立、医療スタッフのキャリアパスの形成などに力を注いでいます。自己の持つ技量を最大限駆使して患者さんの治療に全力を尽くす「Service」、実地臨床から真実を見出して新しい医学を創生する「Service」の両立、すなわち「ダブルS」を有することが医療人の希求条件であり、この理念で医療人を育てていきたいと思っています。

京大病院にとって、医療の国際化は現在の最も重要な課題の一つです。現在ブータンやサウジアラビアと京大病院との、医療スタッフ交流プログラムが具体化しつつありますし、「国際医療部」設置も検討しています。京大病院で行っている高度医療を駆使して国際貢献をしたいと考えています。

4. 結語

本学のような大きな組織がさらなる発展を遂げるためには、構成員全員が組織を愛し、心一つになって努力することが大切と考えます。幸い本学は、超一流の学生・教員・職員から構成されており、各自の愛校心は格別のものであります。私も病院・国際担当理事として本学の発展に寄与したいと思いますので、ご鞭撻の程、お願い申し上げます。

大学の動き

京都大学と滋賀県教育委員会との連携に関する協定を締結

5月9日(木)、本学と滋賀県教育委員会との連携協定ならびに覚書に関する締結式を、百周年時計台記念館にて挙行了た。

本学では、平成15年度に「滋賀県立膳所高等学校生徒を対象とした京都大学の公開講座に係る協定書」を結び特別授業などを行ってきたが、より幅広く高大連携事業を展開するために本学と滋賀県教育委員会とで協議を重ねた結果、本協定および覚書の調印に至った。

この協定では、大学および高等学校における教育の課題に関し、連携して対応し、教育および研究の充実、発展に資することを目的としている。また、覚書では、本協定に基づき、滋賀県教育委員会の定める連携指定校が、本学の教育および研究活動の理解を深め、連携指定校における教育の充実発展のための具体的な取り組みを始めることとしている。平成25年度の連携指定校は膳所、東大津、石山、彦根東、河瀬、虎姫、守山、水口東、安曇川、八日市、米原の11校となっている。

協定式には、本学からは、松本 紘 総長、淡路敏之 教育担当理事・副学長、森脇 淳 理事補、高見 茂 理事補が出席し、滋賀県教育委員会からは、



協定書署名の後、握手をする松本総長と河原教育長

河原 恵 教育長、青木靖夫 学校教育課長、川崎佐剛 学校教育課参事、淵田豊朗 滋賀県立膳所高等学校長が出席された。松本総長および河原教育長が協定書および覚書にサインした後、固い握手を交わし、今後の協力について確認した。

これからの具体的な取り組みについては、本学と滋賀県教育委員会とで相談・検討のうえ、決定する予定である。

なお、教育委員会との連携協力に関する締結は、京都府教育委員会、京都市教育委員会、大阪府教育委員会に続き、4件目となる。

(学務部)

クロックタワーコンサートを開催

本学と京都市立芸術大学が主催して毎年開催しているクロックタワーコンサートを、5月12日(日)に百周年時計台記念館において開催した。今回は、「How to Re:Compose? - モーツァルトの「魔笛」の序曲と夜の女王のアリアをいかに料理するか! 」と題し、京都市立芸術大学の音楽学部・大学院作曲専攻生等がオペラで有名なモーツァルト作曲の歌劇「魔笛」の「序曲」と「夜の女王のアリア」をあらゆる角度から見つめ直し、再創造した自作品について解説



再創造された曲を演奏する様子

を行った後、それぞれの曲を演奏した。会場いっぱいの参加者は、普段聴く機会の少ない独創的な作品に興味深く聴き入っている様子であった。

また、「作曲者本人の考えを本人の言葉として聞けたのはとても良かった」、「音響や演奏者の立ち位置まで構想するという点で、作曲とはなるほど“compose”だと思うようになった」、「フルートのみでの演奏で怨念や幽玄、夜の女王の心境を表しているのが新鮮であった」などの感想も寄せられた。



フルートとピアノによる演奏

(渉外部)

京都大学春秋講義(平成25年度春季講義)を開催

京都大学春秋講義は、本学における学術研究活動の中で培われてきた知的資源について、広く学内外の人々と共有を図るため、昭和63年秋から開講している公開講座である。

今回は、メインテーマを「アジアにおけるインド・中国のパワー」として3回の講義を行った。1回目は4月24日(水)に劉 徳強 地球環境学堂教授の「中国パワーの源泉と行方」、2回目は5月8日(水)に田辺明生 アジア・アフリカ地域研究研究科教授の「現代インドのダイナミズム—多様性社会の挑戦」、3回目は5月15日(水)に中西 寛 法学研究科教授の「中国、インドの「復活」とその政治的影響—文明的大国と21世紀の国際政治」と題した講義であった。各回ともほぼ満員となる盛況ぶりで、講義後には活発な質疑応答が行われた。

参加者からは「世界史の中でインド、中国をとらえてみることで将来の在り方が見えることがわかり、



会場の様子

一層興味がわいた」、「日本のジャーナリストによる報道とは違った話が聴けた」、「経済・政治の成熟と倫理(人権)は深くリンクしているという説明に説得力があった」などの感想が寄せられた。

次回は平成25年度秋季講義として、9月21日(土)、29日(日)に各日2回の講義を行う予定である。

(渉外部)

日本で最初に edX のコンソーシアムに参加

本学は、5月21日(火)より日本の大学として初めて edX^{エデックス}(※) に「KyotoUx」という名称で参加し、授業提供を開始すると、記者会見を行い発表した。参加の背景には以下のような理由がある。

- ・ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学(MIT)に代表される世界のトップ大学連合による非営利組織によって運営されていること
- ・edXを通して提供される「Massive Open Online

Courses」(MOOC: ムーク)と呼ばれるインターネットを利用した新たな教育方法が、プラットフォームと講義コンテンツのオープンソース化に基づいていること

- ・自らのオンライン講義だけではなく、参加大学のオンライン講義とキャンパスでの対面講義の相乗効果を活かすブレンディッド学習(Blended Learning)による教育改善を重視していること
- ・edXによって収集されるオンライン学習データの分析と教育効果の検証を通じて、授業を提供する本学の教育開発の支援が可能となること

会見で松本 紘総長は、「我々がedXに加盟するということは、単に本学の優れた教育をMOOC講義を通して世界中の人々に提供するというだけでなく、高等教育を最先端で革新していこうとする世界のトップレベルの大学が集うコンソーシアムの一員となる自覚と責任を持つということでもある」と述べ、また「留学生や外国人教員、英語による講義等の増加や入学時期の検討などに留まることなく、グローバル・アカデミック・ネットワークの中で名実共にリーダーシップを発揮していくことが使命と心得ており、その重要なステップとして、本学における情報コミュニケーション技術(ICT)を活用した世界トップレベルの教育・研究環境や支援体制の整備や教育の情報化などに全力を尽くしていきたい」との意向を示した。

本学から配信する最初の講義は、上杉志成 物質-細胞統合システム拠点・化学研究所教授の「生命



記者会見の様子

の化学: Chemistry of Life」で、2014年の春から配信する予定であり、2013年の夏から受講の募集を始める。

edXホームページ内の「KyotoUx」のページへは、本学ホームページ「京都大学OCW」<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja> からリンクしている。

※非営利機関「xコンソーシアム」の一つで、ハーバード大学とMITが共同で設立し、世界トップクラスの大学で構成されている。オンライン授業とキャンパス授業の互換性の実現に焦点をあて、画期的な方法論、学習、ゲームのような体験、最先端の研究などをオープンソースのプラットフォーム上で提供する。また、受講者の世界的なコミュニティを形成すべく、すべての年齢・地位・所得の学生に感動的で意識を変革するような知識を提供している。

(情報環境機構)

「入試改革検討本部」の看板除幕式を举行

5月27日(月)に、「入試改革検討本部」の看板を上掲するための除幕式を举行した。

「入試改革検討本部」は、先頃発表した「京都大学特色入試」の各学部における検討への支援や、本学が求める人材確保のための高大連携および入試広報

を推進するために、平成24年11月6日(火)に設置したものである。

除幕式には松本 紘 総長をはじめ、入試改革検討本部長の淡路敏之 教育担当理事・副学長等、学内関係者が多数出席した。

まず、松本総長および淡路本部長による除幕を行い、その後、松本総長から、入試改革検討本部設置の経緯や業務内容について説明があり、今後の期待を込めて挨拶を終えた。

「特色入試」は、高等学校における幅広い学習に裏付けられた総合力と学ぶ力および高い志を評価し、個々の学部が定めたカリキュラムと教育コースへの適合力を有する者を求める選抜となっている。この「入試改革検討本部」でのさまざまな取り組みが、優秀な志願者確保につながるものと期待される。



松本総長および淡路本部長による上掲

(学務部)

部局の動き

工学研究科物理系四専攻桂キャンパス移転記念式典を挙行

工学研究科物理系四専攻(機械理工学専攻, マイクロエンジニアリング専攻, 航空宇宙工学専攻, 原子核工学専攻)の桂キャンパスへの移転を祝して、5月11日(土)に記念式典および祝賀会が約140名の学内外の関係者の参加のもとで盛大に挙行された。

記念式典では、実行委員長の小森 悟前工学研究科長の開会の挨拶と物理系移転WG主査の蓮尾昌裕教授による移転報告に続き、西阪 昇財務・施設・環境安全保健担当理事・副学長、北野正雄工学研究科長、菊池潤治桂坂学区自治連合会前会長から祝辞が述べられ、その後、大罵幸一郎元工学研究科長、並河宏明前施設部長、田上雄一朗元財務部財務課長

らが加わり、テープカットが行われた。

引き続き、C3棟内の施設見学会およびC3棟エントランス横に新設されたレストラン「ソレイユ」において祝賀会が開催された。祝賀会では大罵元工学研究科長、「京機会」(工学研究科機械系の同窓会)の松久 寛会長および「航空宇宙応物同窓会」の土屋和雄会長による祝辞があり、その後、名誉教授を含む多数の物理系出身の参加者と物理系教職員との間で、桂キャンパスでの大学院教育・研究の抱負等について語り合い、伊藤秋男原子核工学専攻長のお礼の挨拶で盛会裡に閉会した。



テープカットの様子



施設見学の様子

(大学院工学研究科)

寸言

東の理化学研究所から西の京大を思う

玉尾 皓平

私が工学部合成化学科2期生として入学した昭和36年はわが国の高度成長期の絶頂期であり、百万遍門の一角の赤レンガ建物が壊され、新たな工化総合館建設の槌音が響きわたる、誠に元気あふれる時代であった。設立当時の合成化学科の教官の皆さんは目を輝かせて、君たちを化学のフロンティアに育てる、と熱く語り、私たち学生もそれに応えようと、勉学・研究に励むとともに、全学科合同懇親会や学期末の学生主催謝恩会などを企画し、教官と学生が渾然一体となって活動したものである。その「教官・学生の一体感」が数年後の学園紛争で失われてしまったのは誠に残念なことであった。しかし、工学部化学系には「京大の自由の学風」「喜多イズム」が脈々と受け継がれていた。

わが恩師熊田 誠は、大きな方向性を示して、あとは若い人にまかせる、まさにその京都学風を体現した学者であり、のびのびと研究させてもらえたことがありがたかった。学生として研究室配属から助手16年間を経て、助教授まで29年間、工化総合館231号室で過ごした。まさにインブリーディングの代表選手ともいえるもので、昨今の評価では最低にランクされ、昇進の道は閉ざされるであろう。しかし、幸いにして平成5年に、京大での最後12年間を宇治キャンパスの化学研究所で研究室を主宰する機会をいただいた。

化学研究所は、「京都学風」そのままに、物理、化学、生物分野の約30研究室が分野の垣根のない、誠に自由な雰囲気の研究のできる環境が生きていた。平成12年に化学研究所所長を拝命した頃には、「東の理化学研究所、西の京大化学研究所」との標語を掲げ、「科学者たちの自由な楽園：栄光の理化学研究所」(宮田親平著、1983年、文藝春秋社)のミニ版としての化学研究所の「自由の学風」を守ることの重要性を所員に訴えた。書物でしか知らなかったその理化学研究所に、その数年後に奉職することになるとは夢にも思っていなかったのだが。

平成17年、理化学研究所野依理事長からのお誘いを受け、京大を定年より1年早く辞し、「東の理化学研究所」に移った。そこでは、科学者たちの自由な楽園の精神、いわゆる「理研精神」「大河内精神」が脈々と受け継がれていることを実感できた。大河内正敏が大正10年から昭和21年まで25年間にわたって所長を務め、主任研究員制度の導入と理研コンツェルンの導入など、理研の伝統の礎を築いたのである。理研精神、大河内精神とは、「基礎研究の重視」と「産業界との積極的連携」の両立、としばしば表現されるが、上記書物に記述の「科学者の精神の解放」との表現の方がぴったりくる。分野を越え、組織を越え、国を越えて自由に研究する精神を研究者に植え付けたのである。

この理研精神を京都大学化学系に導入したのが喜多源逸である。自由の学風の「喜多イズム」を構築した喜多は、大正11年に京大教授に就任すると同時に、同年発足した理研の主任研究員制度にも、湯川秀樹、朝永振一郎、寺田寅彦ら10余名とともに名を連ね、京大に理研喜多研究室を設けて、多くの門下生を育てた。喜多が京大化学研究所所長を務めた昭和5年から同17年は、理研大河内所長在任期と期を一にしている。その間、門下生を理研に派遣することなどを通して、化学研究所を理研同様に科学者たちの自由な楽園に作りあげた。それと並行して、昭和14年から同16年にかけて、工学部における燃料化学科と繊維化学科の創設にも関わり、喜多イズムを広めて定着させた。この中から、後のノーベル化学賞受賞者福井謙一、野依良治らが輩出した。

この「喜多イズム」は、京大化学研究所では受け継がれていると確信しているが、工学部化学系はその「喜多イズムの故郷、吉田キャンパス」を後にして、約10年前に桂キャンパスに移転してしまった。新たな伝統を生みだすことと共に、伝統の継承もそれ以上に重要である。「故郷の吉田キャンパスに、それを聴きにゆく」ような喜多イズムの伝統を保存したスポットを復元しておくのも、歴史ある京大にとっては、重要ではないかと、東の地で、強く思う今日この頃である。(敬称略)

(たまお こうへい 理化学研究所研究顧問、日本化学会会長、昭和40年工学部卒業)

随想

和歌山での遊 / 学と垣間みた酵素学の深淵

名誉教授 泉井 桂

定年退職後、和歌山県にある近畿大学の学部(紀の川市)と研究所(海南市)に赴任し、今年で9年目になる。移り住んだ当初の和歌山の印象は、京都に比べて光が溢れ手つかずの自然が豊富なことであった。歴史も平安時代より



古く、久々の開放感も手伝って、和歌山北部の風物に大いに親しむこととなった。天気の良い日に外出しないでいると、“お天道様に責任を感じる”ほどになってしまった。

私のしたこと感じたことをいくつかご紹介すると、まず第一に、紀の川・吉野川の河口から源流域までの136 kmに架かる80本の橋を何日もかけて“網羅的”にすべて写真に撮ったことである。橋と川の風景や歴史に惹かれてのことだったが、これはその頃生物学の分野で勃興してきた“網羅的研究”に対する自分のアレルギーを解消するのにも役立った。

大学のキャンパスは紀ノ川の北岸に位置し、川向うには龍門山(756m)がどっしりと台形の山容を見せている。この山には県の天然記念物のキイシモツケというコデマリに似た低木が自生する。5月下旬に咲き乱れる頂上の群落は実に素晴らしい。かつては新種とされたが現在はイワシモツケの亜種に変更され和歌山県にとっては残念なところである。そこで私は、独立の種か亜種かをDNAの塩基配列などの比較によって判定しようと学生の卒論テーマにも採り上げて調べることにした。山登りの趣味と研究を兼ねて、10回以上は登ったであろうか。

他に感じたことを短く記すと、華岡青洲の里(紀の川市)では「通仙散」の開発にいたる研究理念と方法に感銘を受け、有間皇子の謀殺の地に立つ墓(海南市)では彼の詠んだ歌が時を超えて肉声のように伝わり、和歌のすごさを感じたことなどがある。また、植物の研究者も、植物への殺生に気付き、何らかの供養が必要ではないかと思っていた矢先、キャ

ンパスには“草木塔”はないが、“In commemoration of the flora and fauna used to further science”と刻まれた石碑があることを知り、最近お参りした。

話を研究の雑感に振り向けよう。私は京大の理学部、次に農学部に移り生命科学研究科で定年を迎えた。炭酸固定酵素の一つであるホスホエノールピルビン酸カルボキシラーゼ(以下PEPCと略)の研究は、4回生の時から現在までときに太くときに細く50年も続いてきた。学内外の諸先生と共同研究をさせていただいたおかげである。思い出深いのは、私どもがPEPCの遺伝子のクローニングと塩基配列の決定(1984年)およびその立体構造の解明(1999年)に世界で初めて成功し、この酵素の構造と機能の研究の土台を築いたことである。その後多くの生物種のゲノムDNAについてPEPC遺伝子の帰属や解析が行われ、今では塩基配列データベースへの登録数が13000件にもなる。この酵素分子の任意の場所に突然変異を導入して触媒や活性調節の機能を調べ、いくつかの興味深い知見を得ることができた。実験にあたって立てた機械論的な作業仮説が、結構よく的中した。しかし、的中しなかった場合はその理由がわからず迷宮入りとなった。高等生物への進化の過程で獲得された新しい活性調節機能の構造的分子基盤を探ろうとするとこれまでの方法では役に立たずよく行き詰った。どうやら、数多くのアミノ酸残基の一見目立たない置換が累積されたことに由来するらしい。それらの変異がどのような構造要素の創生をもたらしたのか見当がつかず、私は崖っぷちに出て、未知の深淵を覗いている気分になったことを今も覚えている。これは一般性のある問題であり、次の段階への新展開が期待される。

研究への夢は未だ醒めやらず、なおも(1)PEPCを中心として二酸化炭素の捕集・濃縮の経路を植物に導入して光合成能を高めること、および(2)ホルムアルデヒドを吸収・固定する植物の作出はできたので、さらにメタノールやメタンの吸収能を付与することを夢見ている。将来、水田やシェールガスの採取場で放散されるメタンによる環境汚染の解決に役立つことを期待している。

(いづい かつら 平成17年退職 元生命科学研究科教授、専門は生化学・植物分子代謝制御学)

洛書

異文化の自分化―「我田引水力」

梶島 健治

私は現在、大学で皮膚科の臨床と免疫・アレルギーの研究に主に従事している。せっかくの一度きりの人生なので、できるだけオリジナルでエッジの効いた研究成果を残したいという思いは強くある。しかし、どうすればいい仕事を生み出せるのか、という問題は常々の悩みである。iPS細胞研究の山中伸弥教授は、“vision and hard work”，すなわち「よいvisionをもって一生懸命に働くことが大切である」と講演で述べられていた。身に染みるお言葉である。



“There all the time”という、アスピリンの作用機序を解明してノーベル賞を受賞されたJohn Vane博士の言葉を、我が師より教わったことがある。これは、「大発見といわれる科学的真実も、実は発見されるずっと以前からそこに存在していた」という意味である。たしかにその通りで、アインシュタインが発見するずっと前から、自然(たとえば相対性理論に基づく自然現象)はその通りであったのだ。しかしながら、私のような凡人にはそのかくれんぼをしている科学的本質や真実を見出すことがなかなかできないのが現実である。

Hard workは自分にでもできる(と思う)。しかし、重要な科学的本質や真実を見つけだすために必要なvisionやquestionをどのように有し、そして解決するのが問題である。NatureやScienceといったサイエンスの一流誌でも、同時期にほぼ同一テーマの論文が別々のグループから発表されたりする。つまり、重要なquestionは世界でそれなりに共有されているのである。ところが様々な物事が動いて行く中で、何かのヒントを得て真実を見出す手段に気が付き、そしてそれを実行・実現する人が必然的に現れてくるのである。そういう人物に自分はなりたい！

自然科学をはじめとする多くの学問は、これまでの成果をもとに積み上げられて発展していく。そして過去の偉大な業績を紐解くと、自身の専門的な実験手技や常識とは独立して発展してきた学問領域より新たな手段を見出して解き明かしたケースが多い。

誰もが思いつくような当該分野の既存の方策にとらわれない方が良さそうである。これは何もサイエンスに限ったことではない。iPadのような新商品や電子書籍・アマゾンなどの新システムも、作り出す過程・作業そのものは、いくつかの既存産物や異文化の有機的融合にすぎない。

それではどうすれば異文化をうまく自分に取り込むことができるのだろうか？たとえば、学会に参加してきた学生に、学会の感想を聞くと、「〇〇先生の発表が勉強になりました」とか、「面白かったです」というような答えがよく返ってくる。しかし、これでは異文化を自分の世界に融合できていないし、自分のvisionやquestionも解決されない。ありきたりではあるが、私は自分のvisionやquestionに対する「情熱」が重要だと感じている。そしてその情熱を継続させるには「執着」も必要だと思う。一般に、団塊の世代とそれ以前の人々は、異なる世界の概念を自分の世界に引き込む力が極めて強い。モノが少なかった時代には、そこにあるもの全てを自分の肥やしにしなければならなかったためなのだろうか？「身勝手」という意味での「我田引水力」ではなく、自分の世界へひきこんでしまう我田引水力のようなパワーがみなぎっている。一方、若い人は情報に溢れていることに慣れていて、周辺の世界を自分の世界に引き込むことが不得手であり、不感症とも言える状況である。

“dans les champs de l'observation, le hasard ne favorise que les esprits préparés (偶然は準備のできてない人を助けない)”というパスツールの言葉はまさに言い得て妙である。来るか来ないかもわからない「異文化の発展」という偶然を、我々はvisionとquestionを解決するために情熱をもって待ち構えていなければならない。もちろん異文化に頼るだけでなく、最大限の自助努力をすることが前提であるが。

では次に、どうすれば情熱や執着をもつことができるのか、そしていかによいvisionやquestionを抱くことができるのか、という疑問が残る。しかしながらそういうことを自分で考えて解決するのが京大の良き伝統である。自分自身、模索を続けていきたい。そして、そういう人生を楽しみたい。

(かばしま けんじ 医学研究科准教授、専門は皮膚科)

資料

平成24年度 総長裁量経費による採択事項

平成24年度の総長裁量経費については、下記の16件が採択された。
採択事項および対象部局等は次のとおりである。

プロジェクト等事項名	部局名
最も優秀な課程博士論文の出版助成制度	文学研究科
若手研究者出版助成事業	教育学研究科
高大接続を基礎とした京都大学の教育力強化に関する基礎的実証分析 －(高大接続、入試方法の改善、大学教育の改革の三本柱)への提言のために	教育学研究科
若手研究者に係る出版助成事業	法学研究科
若手研究者の優秀学位論文等出版事業	経済学研究科
生物資源経済学領域の学位論文に対する出版助成事業	農学研究科
若手研究者出版助成制度	人間・環境学研究科
平成24年度地球環境学堂出版助成事業	地球環境学堂
新日本型経営モデル研究叢書シリーズ出版事業	経営管理研究部
若手研究者に係る出版助成事業	人文科学研究科
京都大学アフリカ研究出版助成	アフリカ地域研究資料センター
教育・研究における学際融合促進のための学術分野特性調査	事務本部(総務部)
京都大学高校生フォーラム in TOKYO	事務本部(総務部)
時計台ディスプレイ等のコンテンツ制作	事務本部(渉外部)
大学ムック本「京都大学 by AERA」の制作	事務本部(渉外部)
学生課外活動支援経費	事務本部(学務部)

(財務部)

平成25年度 入学試験諸統計

1. 募集人員・志願者数・合格者数・入学者数等調

学部・日程	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学者数	追加合格者数	入学者数
総合人間学 前期(文系)	65 ^人	227 ^人	227 ^人	227 ^人	68 ^人			125 ^人
前期(理系)	55	212	194	188	57			
文学部 前期	220	665	665	656	226	1		225
教育学部 前期(文系)	50	188	188	187	51			62
前期(理系)	10	41	41	41	11			
法学部 前期	320	780	780	770	332			332
経済学部 前期(一般)	180	629	629	622	190			240
前期(論文)	25	130	88	87	25			
前期(理系)	25	148	110	109	25			
理学部 前期	311	907	890	886	315			315
医学部 前期	250	683	667	656	269	7	2	264
薬学部 前期	80	234	234	227	84			84
工学部 前期	955	2,761	2,761	2,722	960	1		959
農学部 前期	300	855	855	851	315			315
合計	2,846	8,460	8,329	8,229	2,928	9	2	2,921

〈医学部・薬学部学科・専攻別内訳〉

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
医学部	前期	250 ^人	683 ^人	667 ^人	656 ^人	269 ^人	7 ^人	2 ^人	264 ^人
医 学 科	前期	107	338	322	317	112			112
人間健康科学科	前期	143	345	345	339	157	7	2	152
看護学専攻	前期	70	171	171	167	74	6	2	70
検査技術科学専攻	前期	37	78	78	78	40			40
理学療法学専攻	前期	18	28	28	26	19			19
作業療法学専攻	前期	18	68	68	68	24	1		23
薬学部	前期	80	234	234	227	84			84
薬 科 学 科	前期	50	129	129	126	53			53
薬 学 科	前期	30	105	105	101	31			31

〈工学部・農学部学科別内訳〉

学部・日程		募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学 辞退者数	追加 合格者数	入学者数
工学部	前期	955 ^人	2,761 ^人	2,761 ^人	2,722 ^人	960 ^人	1 ^人		959 ^人
地 球 工 学 科	前期	185	352	352		175			175
建 築 学 科	前期	80	284	284		82	1		81
物 理 工 学 科	前期	235	725	725		238			238
電気電子工学科	前期	130	432	432		133			133
情 報 学 科	前期	90	334	334		92			92
工 業 化 学 科	前期	235	634	634		240			240
農学部	前期	300	855	855	851	315			315
資源生物科学科	前期	94	——	——	——	97			97
応用生命科学科	前期	47	——	——	——	49			49
地域環境工学科	前期	37	——	——	——	40			40
食料・環境経済学科	前期	32	——	——	——	34			34
森 林 科 学 科	前期	57	——	——	——	59			59
食品生物科学科	前期	33	——	——	——	36			36

※工学部の学科別志願者数及び第1段階選抜合格者数は、第1志望学科の数を示す。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学 部	募集人員	志願者数	第1次選考合格者数	受験者数	合格者数	入学者数
法 学 部	10人以内	22 ^人	18 ^人	9 ^人	5 ^人	5 ^人
経済学部	10人以内	25	13	11	5	5

2. 合格者 最高点・最低点（総点）調

学 部			日 程		満 点	総 点		
						最 高 点	最 低 点	平 均 点
総 合 人 間 学 部			前 期	(文 系)	800 点	653.83 点	542.33 点	573.58 点
				(理 系)	800	602.50	409.50	451.62
文 学 部			前 期		750	621.60	487.83	519.96
教 育 学 部			前 期	(文 系)	900	706.74	602.96	639.30
				(理 系)	900	628.50	544.55	579.95
法 学 部			前 期		750	646.10	475.90	512.08
経 済 学 部			前 期	(一 般)	800	645.75	533.15	563.86
				(論 文)	600	401.16	330.16	353.53
				(理 系)	900	713.30	563.21	604.83
理 学 部			前 期		1,200	975.50	724.10	793.80
医学部	医 学 科		前 期		1,300	1,143.15	946.85	1,003.49
	人 間 健 康 科 学 科	看 護 学 専 攻			1,200	748.56	590.50	642.24
		検 査 技 術 科 学 専 攻			1,200	846.36	692.20	751.68
		理 学 療 法 学 専 攻			1,200	846.86	668.63	749.61
		作 業 療 法 学 専 攻			1,200	823.26	689.73	722.61
薬学部	薬 科 学 科		前 期		950	754.81	602.80	647.15
	薬 学 科				950	800.71	600.86	644.00
工学部	地 球 工 学 科		前 期		1,000	710.25	545.21	577.03
	建 築 学 科				1,000	785.38	559.01	611.05
	物 理 工 学 科				1,000	805.90	584.10	640.27
	電 気 電 子 工 学 科				1,000	772.86	571.66	617.02
	情 報 学 科				1,000	751.28	581.03	632.88
	工 業 化 学 科				1,000	783.91	562.16	610.58
農 学 部			前 期		1,050	843.73	634.58	682.88

(備考) 1. 法学部・経済学部の外外国学校出身者のための選考を除く。
2. 総点については、前期合格発表時のものである。

3. 志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調

上段…志願者数
下段…入学者数

都道府県		学						部					計	
		総合 人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農		
								医学科	人間健康 科学科					
北海道		7 2	19 7	7 3	13 5	14 4	21 10	3			4 1	31 6	8 3	127 41
東北	青森	1	2 1	1	1 1	2 1	2		1	1		1 1	1	13 4
	岩手	1 1	1	1		4						2	2	11 1
	宮城	7 2	6 3	3	4 1	7 3	8 3	1	1 1			13 5	6 1	56 19
	秋田	1	2 2		1 1		6 1					2 1		12 5
	山形				6 3	1 1	2 1		1 1	1		6 3		17 9
	福島	5 2	3	2	1	3 1	5 2	1	1	1	1	7 2	4 2	33 9
関東	茨城	7 2	6 3	1	6 1	10 2	4 1	2	5 3			21 8	8 2	70 22
	栃木	4	2 1	1	2 1	4	3 1		3 1			7 3	4 2	30 9
	群馬	5 1	4 1	1	1	7 2	9 1		1	2	12 5	7 3	49 13	
	埼玉	8	10 1	1	7 2	16	14 5	1	1 1	5	45 12	12 2	120 23	
	千葉	11 1	13 5	6	11 2	19 2	28 9		4 1	3 2	42 7	9 3	146 32	
	東京	48 12	72 18	19 1	47 11	99 19	98 33	12 1	8 3	11 1	126 39	62 17	602 155	
中部	神奈川	14 4	13 4	6	17 5	32 6	19 6	2	2	3 1	68 16	12 5	188 49	
	新潟	2 1	4	2 1	5 1	6 1	12 5				20 4	6 4	57 17	
	富山	3 2	8 3	2 1	2	6 1	10 3	2 1		1	20 7	4 2	58 20	
	石川	5	16 8	4 1	9 5	9 3	11 2	5	7 5	3 1	30 8	9 3	108 36	
	福井	3 1	7	2 1	10 3	9 2	7 1		4 3	2 1	27 7	6 2	77 21	
	山梨	4 2				2	3 1		1 1	2 1	7 4	2	21 9	
近畿	長野	8 2	9 1	4 2	8 3	11 1	13 3		5 1	2	13 4	7 2	80 19	
	岐阜	12 2	14 7	10 2	14 8	10 3	11 5	1	2 1	6 3	56 23	13 8	149 62	
	静岡	8 3	14 10	2 1	9 3	12 2	22 11	3	3 2	11 4	42 20	13 7	139 62	
	愛知	17 7	38 10	11 3	53 24	64 18	60 29	10 2	16 5	22 10	203 79	37 17	531 204	

都道府県			学							部						計	
			総合 人間	文	教育	法	経済	理	医		薬	工	農				
									医学科	人間健康 科学科							
近畿	三重	61	107	62	74	175	156	61	64	51	6027	15666					
	滋賀	22	146	71	188	123	246	32	1912	61	9428	2174					
	京都	3013	7427	226	8136	9523	6325	5120	4521	239	29490	10036	878306				
	大阪	6224	9827	3711	16070	14142	11535	4614	10641	3816	575196	19676	1574552				
	兵庫	439	4014	1910	6932	10033	6727	8441	3718	179	252105	8236	810334				
	奈良	248	3616	53	6237	5420	3819	4516	147	198	22183	5423	572240				
	和歌山	41	53	37	78	53	93	64	62	414	152	10230					
中国	鳥取	32	43		43	22	62		11	22	93	3416					
	島根	11	22			23	11	11		138	210	2510					
	岡山	81	126	41	135	81	74	22	51	316	112	12239					
	広島	155	2711	121	2817	2815	4824	74	135	114	8234	157	286127				
	山口	31	31	21	84	71	41	21	11	25	93	5518					
四国	徳島	21			63	21	94	2		12	91	412	3512				
	香川	41	42		146	93	104	32	22	42	248	52	7928				
	愛媛	32	72	31	124	83	133	21	31		2410	61	8125				
	高知	33	71	31	33	53	92	11	1		134	94	5418				
九州	福岡	165	257	53	2912	268	326	155	33	83	9737	215	27791				
	佐賀	22	11	13	23	26	62		11		11	52	3213				
	長崎	31	31	11	21	81	24	45	15	15	85	125	4920				
	熊本	43	72	31	41	21	71		12	24	174	104	5715				
	大分	13	53		11	82	22	22	21	22	112	63	3911				
	宮崎	31	43	21	41	31	61	11	41	12	41	41	3612				
	鹿児島	72	55	51	63	192	42	21	25	172	82	7813					
	沖縄	22	31	12	41	61	21		11	51	11	273					
	合計	432125	659225	22762	770331	894240	890311	335112	344152	23284	2,740957	849315	8,3722,914				

〔備考〕 法学部・経済学部以外の外国学校出身者のための選考を除く。

大学入試センター試験および個別学力検査において受理された出願資格が、ともに高等学校または中等教育学校卒業（出願時見込みを含む）である者のみ各欄に掲載する。

4. 志願者・入学者 入学資格取得年別調

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役 25.3卒	浪 人 24.3以前卒	総 数	現 役 25.3卒	浪 人 24.3以前卒
総 合 人 間 学 部	439	258	181	125	81	44
	認 5 他 2	認 1	認 4 他 2			
		58.8%	41.2%		64.8%	35.2%
文 学 部	665	445	220	225	156	69
	認 6	認 3	認 3			
		66.9%	33.1%		69.3%	30.7%
教 育 学 部	229	146	83	62	44	18
	認 2	認 1	認 1			
		63.8%	36.2%		71.0%	29.0%
法 学 部	780	507	273	332	221	111
	認 7 他 2	認 2	認 5 他 2	認 1		認 1
		65.0%	35.0%		66.6%	33.4%
経 済 学 部	907	577	330	240	151	89
	認 11 他 2	認 6	認 5 他 2			
		63.6%	36.4%		62.9%	37.1%
理 学 部	907	582	325	315	188	127
	認 15 他 1	認 4 他 1	認 11	認 3 他 1	認 2 他 1	認 1
		64.2%	35.8%		59.7%	40.3%
医 学 部 医 学 学 科	338	204	134	112	79	33
	認 2		認 2			
		60.4%	39.6%		70.5%	29.5%
医 学 部 人間健康科学科	345	228	117	152	107	45
	認 1		認 1			
		66.1%	33.9%		70.4%	29.6%
薬 学 部	234	147	87	84	52	32
	認 2		認 2			
		62.8%	37.2%		61.9%	38.1%
工 学 部	2,761	1,806	955	959	572	387
	認 20 他 1	認 7	認 13 他 1	認 2	認 2	
		65.4%	34.6%		59.6%	40.4%
農 学 部	855	531	324	315	166	149
	認 6	認 4	認 2			
		62.1%	37.9%		52.7%	47.3%
合 計	8,460	5,431	3,029	2,921	1,817	1,104
	認 77 他 8	認 28 他 1	認 49 他 7	認 6 他 1	認 4 他 1	認 2
		64.2%	35.8%		62.2%	37.8%

(備考) 認…高等学校卒業程度認定試験合格者 (大学入学資格検定合格者含む)

他…その他の入学資格取得者

認, 他は内数

〔外国学校出身者のための選考に係る入学資格取得年別調 (外数)〕

学 部	志 願 者			入 学 者		
	総 数	現 役 25.3卒	浪 人 24.3以前卒	総 数	現 役 25.3卒	浪 人 24.3以前卒
法 学 部	22	22	0	5	5	0
		100.0%	0.0%		100.0%	0.0%
経 済 学 部	25	25	0	5	5	0
		100.0%	0.0%		100.0%	0.0%

(学務部)

話題

第8回 京都大学附置研究所・センターシンポジウムを開催

本学の22の附置研究所・センター主催によるシンポジウム「京都からの提言 21世紀の日本を考える」(後援：読売新聞社、北海道大学)が、3月16日(土)札幌市・北海道立道民活動センター「かでる2・7」かでるホールにおいて開催された。

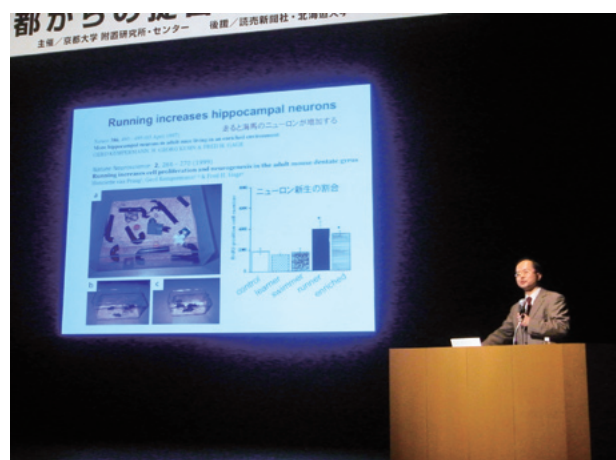
第1回東京、第2回大阪、第3回横浜、第4回名古屋、第5回福岡、第6回京都、第7回神戸に続く第8回目の今回は、「科学が見いだす日本の進路」をサブテーマとして行われた。

シンポジウムでは、松本 紘総長に代わり浅野耕太総長首席学事補佐(大学院人間・環境学研究科教授)が本学を代表して開会の挨拶を行い、本学の附置研究所・センターが持つ独自の研究業績を社会に還元することを目的として「京都からの提言」を10年間かけて全国の政令指定都市を巡るという本シンポジウムの趣旨を説明した。

続いて北海道での開催にあたり、佐伯 浩北海道大学総長から歓迎の挨拶をいただいた後、本学附置研究所・センターの教員4名ならびに平成22年ノーベル化学賞を受賞した鈴木 章 北海道大学名誉教授により、次の基調講演が行われた。

- ・「宇宙のはじまり」田中貴浩基礎物理学研究所教授
- ・「過去から学ぶヒトの未来：環境変動と霊長類の進化」高井正成霊長類研究所教授
- ・「科学を学ぶことの重要性」鈴木 章(平成22年ノーベル化学賞受賞)北海道大学名誉教授
- ・「大人の脳で新たに生まれる神経細胞とその不思議な役割」影山龍一郎ウイルス研究所教授
- ・「がん細胞を狙い撃ち—中性子捕捉療法」小野公二原子炉実験所附属粒子線腫瘍学研究センター長・教授

最後に、「科学が見いだす日本の進路」をテーマに、九後太一基礎物理学研究所長をコーディネーターとし、津田一郎北海道大学数学連携研究セン



影山ウイルス研究所教授による基調講演の様子

ター長、常松健一読売新聞大阪本社編集局科学部長をゲストパネリストに迎え、事前に会場から募った中から質問を選び、先に講演を行った附置研究所・センターの教員4名がそれに答える形でパネルディスカッションが行われ、科学を学ぶことの大切さ、社会を支えている基礎研究の重要性および役割について討論が行われた。

当日は積雪にも関わらず480名余りの参加者があり、多くの質問用紙が提出されたように、参加者は熱心に聴講し、盛況のうちに終了した。このシンポジウムは、第9回を仙台市にて開催予定である。

(肩書きはシンポジウム開催時のもの)



パネルディスカッションの様子
(左から、九後基礎物理学研究所長、津田北海道大学数学連携研究センター長、常松読売新聞大阪本社編集局科学部長)

(基礎物理学研究所・数理解析研究所)

体育会による壮行会を開催

4月23日(火)、時計台前広場にて体育会の壮行会が開催された。

この催しは毎年、体育会各所属団体の一年間の活躍と体育会全体の発展を期して行われているもので、体育会所属の全クラブのメンバーが集結したほか、晴天に恵まれた昼休みの時間帯とあって、多くの学生が集まった。

当日は松本 紘総長、赤松明彦学生担当理事・副学長、小田滋晃体育会会長が出席し、松本総長からは「学業との両立は簡単ではありませんが、昨年ヒマラヤの未踏峰登頂に成功した山岳部、2012年の男子日本代表選手を輩出した男子ラクロス部など、輝かしい成績を残している部もたくさんあります。学生諸君には、『自鍛自恃』を心がけ、自らを鍛えてください」と激励の言葉が寄せられた。

また、小田体育会会長からは、「七大戦を通じた他大学との交流など、今ここでしか築けない繋がり



激励の挨拶を述べる松本総長

を大切にしてください」とのメッセージが寄せられた。

陸上競技部主将・西村優汰氏の宣誓の後、応援団による演舞演奏が行われた。青空の下に披露された気迫溢れるパフォーマンスは、体育会の学生の士気を大いに盛り上げた。

(学務部)

宇治キャンパスで「平成25年度新任教職員及び新入院生等のための安全衛生教育」を開催

宇治キャンパスでは、4月25日(木)宇治おうばくプラザきはだホールにおいて、「平成25年度 新任教職員及び新入院生等のための安全衛生教育」を開催した。

この講習は、安全に職務や研究を行うために必要な安全衛生に関する知識を修得することを目的として、新たに宇治キャンパスで実習・研究を実施する学部4回生、大学院生および新規配属の教職員等を対象に毎年実施しているものである。

宇治事業場総括安全衛生管理者 佐藤直樹化学研究所長の挨拶の後、宇治事業場衛生委員会委員長 片平正人エネルギー理工学研究所教授、総合環境安全管理センター長 角 哲也防災研究所教授をはじめ、安全衛生関連の委員会委員等による講演を行った。宇治事業場の安全衛生管理体制や防災対策、生物実



佐藤化学研究所長による挨拶(左)、
片平エネルギー理工学研究所教授による講演(右)

験・化学実験等各種実験を行う上での留意事項、実験に伴う廃棄物・廃液の処理に関すること等、宇治地区の実態に即した内容のほか、喫煙問題、PUSH(簡略型心肺蘇生)の講習等の日常生活にも参考となる内容についての講演も行い、計267名(学生187名、教職員80名)の受講者は熱心に耳を傾けていた。

(宇治地区事務部)

総合博物館が台湾大学博物館群と国際シンポジウムと学術交流を実施

総合博物館は4月26日(金)、国立台湾大学博物館群と国際シンポジウム「University Museum Activity Creates Future of University」を清風荘で共同開催した。

新緑の映える清風荘を会場に、5ヶ国30名が参加し、本学および台湾大学博物館群からの各4名による大学博物館に関するテーマの講演と討論会を行った。

本シンポジウムは、総合博物館が継続的に実施している台湾大学博物館群との学術交流をさらに発展させ、大学博物館の国際ネットワークの構築に両大学が積極的に参画していくことを目指して、実施されたものである。

大野照文 総合博物館長の挨拶で始まったシンポジウムでは、午前永益英敏 総合博物館准教授が、午後本川雅治 総合博物館准教授が、司会進行を行い、8名の講師が総合博物館および台湾大学博物館群の現状・問題点などを報告し、それぞれの講演について、参加者との活発な意見交換が行われた。

参加者による意見交換は、二つのセッションや討論会の中だけではなく、昼食や茶会の交歓の場、清風荘の庭を逍遥しながらも活発に行われ、歴史的建築物の持つ場や時間感覚を共有しながら、大学博物館や大学の未来に対する建設的な議論が濃密に展開された。最後に、大野館長がまとめと閉会挨拶を行い、4時間以上にわたるシンポジウムが終了した。

続いて27日(土)に、台湾大学のシンポジウム参加者は研究資源アーカイブおよび総合博物館の施設を見学した。

午前に訪れた研究資源アーカイブ映像ステーション(稲盛財団記念館1階)では、五島敏芳 総合博物館講師が、研究資源アーカイブの目的・特色および映像ステーションで見ることができる研究資源をもとにアーカイブ化した作品を紹介し、その作品の閲覧・視聴方法等の説明をした後、学術探検映画「カラコルム〜カラコラム・ヒンズークシ学術探検



国際シンポジウム参加者(清風荘)

記録」に興味深く熱心に鑑賞した。

午後は総合博物館に移動し、子ども博物館・収蔵室を見学した。子ども博物館では、スタッフの大学院生に活動内容ややりがい等について質問し、子どもたちが熱心に活動に参加している風景を写真に収めていた。

また、収蔵室では260万点と東アジアで有数のコレクションを所蔵する総合博物館の標本資料を見学し、その研究や保管についての意見交換を行った。日本統治時代の台北帝国大学当時に収集され、現在も台湾大学博物館群で収蔵されている学術標本資料について、本学に収蔵されている同時代の標本資料も対象とした共同研究を進めていくことで合意した。

今回のシンポジウムの主要な参加者は、本学総合博物館と台湾大学博物館群のスタッフである。両博物館の交流は平成24年の学術交流協定に基づく植物標本のデータベース化(総合博物館)、同9月の環太平洋大学協会(APRU)のシンポジウム(総合博物館)の開催、さらには平成25年3月に、子ども博物館の紹介を中心としたミニシンポジウムの開催(台湾大学)などを通じてきわめて活発である。本学と台湾大学が歴史的にも関係の深いこと、一拠点に標本を集めた本学総合博物館と、それぞれの部局が博物館をもつ台湾大学の博物館群のお互いの優れた点を共有できることなどが、その背景にある。しかし、最

大の理由は、標本収集・維持管理から、研究・教育への利活用、さらには普及まで熱意をもって関わっている両大学の博物館の教職員・大学院生・学生の

間の連帯意識である。今後も両大学の博物館は共同作業を深めていく予定である。

(総合博物館)

大学文書館 常設展「第三高等学校の歴史」を開設

大学文書館では、5月1日(水)より百周年時計台記念館1階歴史展示室にて、常設展「第三高等学校の歴史」を開設した。

第三高等学校(三高)は、明治2年に化学・物理の学校として大阪に開講した^{せいみきょく}舎密局を始まりとし、その後何回かの制度の改編を経て明治22年に京都に移転し、明治27年に第三高等学校という名称になった。以後、戦後の教育改革の中で京都大学に統合されるに至るまで、三高は、京都という歴史と文化の街で独自の「自由の校風」を築いてきた。

このたび大学文書館は、三高の貴重な資料と精神を永く後世に継承するため、折田彦市胸像、高橋是清^{きごう}揮毫の第三高等学校校銘板、舎密局創立の起源が記された書面など、数々の資料の常設展示を開始した。



展示会場に会場した松本 紘総長と西山 伸大学文書館教授



展示会場風景

本展示では、三高の歴史を時代順に以下の三つのテーマに分け、写真や各種史料約70点を公開している。

・テーマ1 大阪から京都へ

三高の「自由」の校風をよく表す「称呼ノコト」(生徒と教師が互いに「さん」づけで呼び合うことを定めた)など、三高の始まりを象徴する史料を展示している。

・テーマ2 生徒たち、教員たち

湯川秀樹や朝永振一郎をはじめとした^{そうそう}錚々たる学者たちを輩出した三高の、伸び伸びとした教育の一端を垣間見ることができる。

・テーマ3 激動の時代

戦時期、そして敗戦後の三高生たちが置かれていた厳しい状況とともに、よく訪れた喫茶店のメニューや記念祭関係の史料など、その状況下でも学園生活を充実させていた様子なども描き出している。

(大学文書館)

薬学研究科で附属薬用植物園の見学会を開催

薬学研究科では、附属薬用植物園において、5月12日(日)、5月15日(水)の2日にわたり、合計5回、「第2回薬用植物園見学会」を開催した。見学会は昨

年度から実施し、今年で2回目を数える。

両日とも好天の中、本学部卒業生、本学教職員、近隣住民の合計137名が参加し、佐治英郎薬学研究

科長・薬用植物園長の挨拶の後、伊藤美千穂薬品資源学分野准教授による説明が行われた。参加者は説明を熱心に聞き、また実際に薬用植物に触れるなど



薬用植物に直接触れる参加者の様子

して薬用植物に対する知見を深め、好評のうちに見学会は終了した。



伊藤准教授による説明の様子

(大学院薬学研究科)

訃報

このたび、^{かめやまさくに}亀山正邦名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

亀山 正邦 名誉教授



亀山正邦先生は、平成25年4月24日逝去された。享年89。

先生は、昭和25年3月東京大学医学部医学科を卒業、同年4月同学部附属病院において実地修練開始、同26年3月終了、同年4月から同29年3

月まで同学部内科学第三講座において研究に従事、同29年4月から同32年3月まで同大学院医学研究科博士課程に特別研究生として在籍、同32年4月から同年9月まで同大学医学部内科学第三講座において研究に従事した。その後、昭和32年10月から同47年3月まで社会福祉法人浴風会病院において医師として勤務、同年4月から同50年11月まで東京都養育院附属病院に副病院長として勤務した。この間、昭和34年2月に東京大学より医学博士の学位を授与されている。昭和50年11月京都大学医学部教授に採用され、老年医学講座を担当、その後同54年10月神経内科学講座の新設に伴い同講座の初代教授となり、同

講座の基礎の確立と発展に尽くした。

昭和62年3月京都大学を停年退官され、同年4月本学より名誉教授の称号を授与された。退官後は、住友病院長、続いて名誉院長を務められた。

先生は、老年病および脳卒中研究の第一人者であり、永年にわたって老年医学講座および神経内科学講座の管理運営、学問の研鑽にあたりと共に後進の指導、学生の教育および診療に尽力し、老年医学ならびに神経内科学の進歩に貢献された。殊に本学医学部神経内科学講座は日本における最初の講座として注目され、その発展への貢献は高く評価されている。

また先生は、日本神経学会、日本老年医学会、日本脳卒中学会、日本動脈硬化学会の会長を務める一方、厚生省医師国家試験委員長や、科学技術庁将来科学技術予測委員会委員長等を歴任し、厚生、科学技術行政にも多大の貢献を果たされた。平成3年には紫綬褒章を授与された。

(大学院医学研究科)